

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標	達成度
ふるさと魅力を発見・発信し、次代を生き抜く児童生徒の育成 —地域の特性を生かした主体的・対話的取り組みを通して—	①地域とともにある学校づくり (体験活動を通したふるさとの魅力を発見・発信する活動) ②離島へ地教育の推進 (児童生徒の実践的コミュニケーション能力を育むための研究)	A : ほぼ達成できた B : 概ね達成できた C : やや不十分である D : 不十分である
●は共通評価項目、○は独自評価項目		

3 目標・評価

①地域とともにある学校づくり(体験活動を通したふるさとの魅力を発見・発信する活動)							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	・アンケートで「学校行事や体験活動に楽しく参加できている」と回答する児童生徒を80%以上にする。 ・アンケートで「将来の夢ややりたいことがある」「その実現のために、今やるべきことは何かを考え、努力している」と回答する児童生徒を80%以上にする。	・学校行事において、自分ができることを考えて実行に移すことができるように支援する。 ・ゆき会活動において、児童生徒の意見や主体的な活動を尊重することで、達成感や自己肯定感を高める。 ・事前に、話を聞いてみたい職種等についてのアンケートを実施し、生徒の興味・関心が高まるような職業講話を企画する。 ・外部講師の話を聞くことで、様々な人との関わりを通して、働く意義や喜びを感じ取らせる。	B	・ゆき会活動において、児童生徒の意見や主体的な活動を尊重することで、達成感や自己肯定感を高めることができた。 ・アンケートの「学校行事や体験活動に楽しく参加できている」項目が70%であったので、行事や体験活動の実施方法について考える必要がある。	・各行事や学校行事において一人一役という形で役割を与えて、一生懸命取り組ませることで、児童が責任感や達成感、成就感を味わえることができるようにすることで児童が自己有用感をもつようになりたい。 ・他県からの島留学生生なので、本県や他県の高校進学の情報調べさせ、やりたい職業にあった高校選びをしていきたい。
	●健康・体づくり	運動習慣・食習慣の改善や自己管理能力の育成	・アンケートで「週3日以上、15分程度の運動を継続した」と回答する児童生徒を100%にする。 ・アンケートで「帰宅の際や食事の前に丁寧に手を洗う」と回答する児童生徒を100%にする。 ・食の大切さを理解し、自分の健康を保つために必要な食べ物を食べることができるようにする。	・昼休みは、できるだけ多くの教職員が関わり、児童生徒と運動場や体育館で運動するように奨励する。 ・年間を通じて手洗い・うがいなどの大切さを啓発し、正しい手洗いの仕方について保健指導を行う。 ・給食についての反省会を行い、食生活の見直しをさせ、食の大切さを伝えていく。	B	・昼休みには、そのほとんどにおいて、児童生徒と何人も職員が体育館に集まり、卓球やバスケットボールなどをして遊び、運動に親しむことができた。 ・体育の授業では3分程度の走りを取り入れて基礎体力の強化を継続して回り、マラソン大会前には授業以外にも自主的に練習に取り組むことができた。 ・アンケートの結果「帰宅の際や食事の前に丁寧に手を洗う」と回答する児童生徒は100%ではなかったため、衛生週間を全児童生徒に身に付けさせる必要がある。 ・給食より等での食に関する指導を通し、食の大切さを理解することができた。	・昼休みは、よく体を動かして遊んでいる様子が見られたので、今後も休み時間の遊びを通しての運動を促していく。 ・体育の授業の前半3分間程度の走りを取り入れたのは良かったので、継続していきたい。 ・正しい手洗いの方法について保健指導を充実させ手洗いの習慣を身に付けさせたい。 ・食に関する指導を充実させ、食の大切さ・正しい食生活を身に付けさせたい。
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	規範意識、モラルの高揚	・会議の議題を協議と報告とに明確に分けることで、会議時間の効率化を図る。 ・毎週水曜日に定時退勤日を設定し、職員は17:00、管理職も17:30には退勤する。 ・報・連・相を密にし、小さなことでも職員及び管理職に伝えることで、情報の共有化を図る。 ・教育センターの研修講座に管理職も含めて全員1回は参加するようにし、継続して指導力向上を図る。	・会議資料はペーパーレスとし、事前に資料(データ)に目を通しておく。 ・自分の仕事だけでなく、他の職員への協力を全職員が心がけるよう、管理職が率先して声かけを行う。 ・県内外で行われている様々な研修を紹介し、指導力向上に努める。	A	・職員会議等資料のペーパーレス化を行い、事務の効率化を図ることができた。 ・職員会議前に運営委員会を設定することで、職員会議の円滑な運営ができた。 ・毎週水曜日の定時退勤日には、職員が自ら定時で帰宅するようになった。また、計画的に業務を進めることができたようになった。 ・県内外で行われている様々な研修会に1人1回以上参加し、指導力向上を図ることができた。	・今年度以上に会議資料等の事前配布等に心がけ、事務の効率化を図っていく。 ・定時退勤日以外の日でも、計画的な業務の遂行ができるようになる。 ・様々な研修会に積極的に参加し、教員一人一人の指導力向上を図っていく。
	○学校経営方針の周知	学校教育目標、学校経営ビジョン、本年度教育の重点の周知と実践化	・アンケートで「加唐小中学校の学校教育目標を知っている」と回答する教職員を100%にし、いつでも児童生徒、保護者及び島民に対して説明できるようにする。	・学校便りや学校ホームページでの広報活動や、青友会総会、保護者懇談会、学校評議員会などの場を活用して、周知を図る。	B	・学校評価アンケートでは「加唐小中学校の今年度の教育目標を知っている」と回答した教職員は90%であった。同じアンケートで保護者及び島民の認知度は60%であった。	・毎月発行している学校だよりの中に、学校教育目標を必ず入れることで、教職員、保護者及び島民が目にする機会を多くする。また、職員室内にも掲示するなど手立てを取っていく。
	○開かれた学校づくり	学校と地域の理想的な関係づくり 学校情報の積極的な発信	・月に1回は、保護者や島民に公開する授業参観や学校行事を企画する。 ・保護者、島民を含む年間の来校者を300名以上とする。 ・武蔵王生誕祭、島内除草作業などの島内行事に、教員は積極的に参加し、島民としての役割を果たす。 ・学校便りを毎月1回発行し、島内全戸に配布することで、学校の様子を伝えていく。 ・学校ホームページの更新を小まめに行い、閲覧者が見たい、知りたい情報を分かりやすく伝えていくようにする。 ・小中学校それぞれで毎週1回学級だよりもしくは学年便りを発行し、保護者に対して学校での様子や担任の思いを伝えていく。	・授業参観や学校行事を周知し、多くの方が学校に来校できるようにする。 ・教職員は、島民の一人としての自覚をもって、積極的に島内行事に参加するように心掛ける。 ・1月1回発行の学校便りを島内全戸に配布する。 ・月に1回松島に職員が渡り、全戸に学校便りを配布し、学校の様子を知らせる。 ・ホームページでの情報発信を積極的に行い、内容も更新していく。 ・担任が発行する学級便り(学年便り)を週に1回は発行する。	A	・授業公開や運動会、島内除草作業、プール清掃活動など、保護者や地域の方に協力いただいで学校行事を行い、開かれた学校づくりを実施できている。 ・本校の行事だけでなく、松島分校にも出向き、除草作業や校舎清掃を行った。 ・島民レクレーションを8月下旬に実施し、島民の方々と親睦を深めることができた。	・学校職員だけでは、学校行事を行う事は出来ない。青友会などの会合で、学校の思いを伝えたり、地域の方々の意見を聞いたりして、協働で子どもたちのために行事を行っていく。 ・学校への協力をお願いするとともに、地域の行事には、学校職員も積極的に参加するよう心がけていく。

②離島へき地教育の推進(児童生徒の実践的コミュニケーション能力を育むための研究)

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	言語活動の充実とコミュニケーション能力の育成	<ul style="list-style-type: none"> 校内研究の主題である「実践的コミュニケーション能力の育成」を目指した授業実践を全職員が行う。 スピーチタイムやテレビ会議システムを活用した合同授業等で話合いの場を設定する。また、児童生徒が自己評価できるようにする。 テレビ会議システムや電子黒板等の利活用を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒一人一人に応じた目標を設定することで、その達成を目指した授業ができるようになる。また、テレビ会議システム等を活用した授業では、職員間で授業公開をすることで、指導力の向上を図る。 全校スピーチタイムを月1回程度、他校との合同スピーチタイムを月2回程度設定する。また、ふりかえりシートを活用して、自己評価させる。 ICT利活用研修を実施し、全職員がテレビ会議システムや電子黒板を使うことができるようにする。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒一人一人に応じた目標を設定することで、その達成を目指した授業を実践し、「実践的コミュニケーション能力」を育成することができた。 全校スピーチタイムを月1回以上、他校との合同スピーチタイムを月2回以上実施し、話合いの場を設定することができた。 テレビ会議システムや電子黒板を活用しやすいような環境整備に努め、実践を推進することができた。 次年度からも継続した実践ができるよう、仕組みを考えていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> スピーチタイムについて、校内研究、文化部、国語科で連携して検討し、全職員でスピーチの指導や進め方等について共通理解する。 活発な意見交流の場面の動画を児童生徒に提示し、児童生徒自身が、「質問する力」や「話し合う力」を伸ばすイメージを持つことができるようにする。 ICT機器を活用した授業を全ての教師が実施しようと努めており、自作教材を全ての授業において使用している教科もある。引き続き、ICT機器を使用した授業を行う意識を高く維持したい。 教師だけでなく、児童生徒がICT機器を扱えるようになることが理想であるため、意図的にパソコン機器を使用する授業を設定していく。
		基礎的・基本的な学習内容の確実な習得と思考力・判断力・表現力の育成	<ul style="list-style-type: none"> 12月実施の県学習状況調査において、全ての学年・教科で、県平均を上回るようにする。 アンケートで「普段の授業において、基礎的・基本的な内容の確実な習得を図っている」「思考力、判断力、表現力を育成するために、書く活動や説明する活動を位置付けて、指導をしている」と回答する教職員を80%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習において復習的な課題を課すことで、学習した内容の確実な定着を図る。また、自学を推奨し、興味がある内容や苦手な内容を進んで学習することができるようにする。 毎時間的小テストや単元の終わりに確認テストを実施するなど、定着状況を把握し、必要に応じて補充学習を実施する。 各学年や児童の実態に応じた書く活動を単元の中に計画的に位置づける。また、他学年や他校の児童生徒に発表する活動を設定し、表現力を育成する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 12月実施の県学習状況調査において、多くの学年・教科で県平均を下回っていた。基礎基本の定着を徹底させる必要がある。 アンケートで「普段の授業において、基礎的・基本的な内容の確実な習得を図っている」「思考力、判断力、表現力を育成するために、書く活動や説明する活動を位置付けて、指導をしている」と回答する教職員を80%以上にすることは達成していたが、学力の定着には課題が見られるため、学校全体として基礎学力を向上させるための方策や指導法の改善をする必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを書く活動や筋道立てて伝える活動については、共に思考力・判断力・表現力、さらには研究内容である「実践的コミュニケーション能力」の育成に効果的であるため、引き続き実践していく。 教員対象のアンケートの結果、「家庭学習の仕方などを児童生徒に理解させ、習慣の定着を図っている」については72.5%であったため、家庭学習の仕方についても教職員間で共通理解を図り、児童生徒の実態を把握し、指導していく必要がある。
		指導方法の工夫・改善	<ul style="list-style-type: none"> アンケートで「授業が楽しい」、「授業内容が分かる」、「授業でできるようになった」と回答する児童生徒を80%以上にする。 アンケートで「授業において、児童生徒の学力向上のために指導方法の工夫・改善を図っている」と回答する教職員を80%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 極小規模校のメリットを生かして個別の指導計画を作成・活用し、個の能力に応じたきめ細かな指導を行う。 学習目標の掲示や学習の振り返りを行うなど、唐津市学力向上アクションプランを基本とした授業づくりを徹底して行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の実態に合わせた授業を目指し、「授業内容が分かる」と回答した児童生徒は80%以上であった。 「授業が楽しい」という項目において、80%以下の教科があった。児童の興味関心を引き出すような工夫が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 来年度も児童生徒一人一人に応じた目標を設定することで、実態に合わせた学習指導ができるようにする。 教員間で児童生徒の学習状況を報告することで、適切な学習指導ができるようになる。
	●心の教育	教育活動全般における道徳教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> 各学級において年に1回以上、ふれあい道徳を含めた授業公開を行う。 道徳の授業だけでなく、全教科においても道徳的な価値に触れ、道徳教育を充実を目指す。 アンケートで「周囲に対して思いやりをもって接することができる」と回答する児童生徒を80%以上にする。 年1回は、スクールカウンセラーと担任による授業を実施し、自己理解、他者理解を内容としたものを含め、よりよい人間関係を築く能力を付けさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 道徳の授業については、できるだけ教員同士も相互に参観するよう努め、互いに授業力の向上を図ることができるようになる。 道徳の時間を要(か)め)としながら、各教科、特別活動など教育課程全般で道徳教育の推進を図ることができるようになる。 教育相談の内容と関連させながら、スクールカウンセラーによる授業を実施する。 毎週1時間の道徳の時間を大切にして、児童生徒と共に考えを共有する時間を持つ。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 学級担任は年に1回以上、道徳の授業公開を行うことができた。 道徳の時間を要(か)め)としながら、各教科、特別活動など教育課程全般で道徳教育の推進を図りたい。 スクールカウンセラーとの連携を深め、児童生徒の実態に合わせた内容を設定して、授業を実施できた。 毎週1時間の道徳の時間を大切にして、児童生徒の心の成長を目指すことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 教員同士相互参観の機会を増やし、教員一人ひとりの授業力の向上を図るよう努力する。 道徳の時間を要(か)め)としながら、各教科、特別活動など教育課程全般で道徳教育の推進を図ることができるようになる。 スクールカウンセラーとの連携を更に深め、児童生徒の心の教育の充実を図りたい。 今後も毎週1時間の道徳の時間を大切にして、児童生徒の更なる心の成長を促したい。
		●いじめ問題への対応	児童生徒及び教職員の人権意識の向上	<ul style="list-style-type: none"> 「命の教育」についての授業を年に1回以上行い、自他共に命を大切にしている児童生徒を育てる。 人権・同和教育の視点に立ち、小中合同で「ほんわかタイム」(人権タイム)を年間5回実施し、児童生徒の人権意識の高揚を図る。 人権・同和教育の授業実践に関する職員研修や授業研究会を行い、各教科、道徳、学級活動などと関連させながら「心を耕す」取組へと広げいく。 	<ul style="list-style-type: none"> ふれあい道徳などの機会をとらえ、道徳を中心に心の教育、命の教育を実践する。 「ほんわかタイム」においては、講話だけでなく、資料提示の工夫や体験型活動の導入などの工夫を行い、児童生徒の人権に対する関心を高め、意識の高揚につなげる。 教職員の人権意識向上を目的とした研修会を複数回行い、児童・生徒、地域住民も対象にした講演会等を開催する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ふれあい道徳などの機会をとらえ、道徳を中心に心の教育、命の教育の充実を図ることができた。 「ほんわかタイム」においては、職員一人ひとりが工夫し、児童生徒の人権に対する関心を高めることができた。 教職員の人権意識向上を目的とした研修会を複数回行い、児童・生徒、地域住民を対象にした講演会等を開催することができた。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

- ◇ 実践的コミュニケーション能力育成のため、テレビ会議システムやロボノートを活用した交流授業やスピーチタイムを数多く実践することができた。スピーチタイムでは運営も児童生徒が行い、発達段階に応じた「話す力」、「聞く力」、「質問する力」、「話し合う力」をつけることができた。
 - ◇ 保護者や島民の方々の理解や協力を得ながら教育活動を行うことができた。
 - ◇ 研究授業及び授業研究会を行う中で、指導力の向上に努めることができた。
 - ◇ 日常的に児童生徒の心情や行動の様子についての情報交換し共通理解することに努め、必要に応じて協議を行った。
- ◇ 極少数の良さを生かし個に応じた授業を実践しているが、家庭学習との連携を図り、確実に定着させていくことが今後の学力向上の鍵である。
- ◇ 来年度は小学校4名、中学校2名の計6名になる。少ない人数で学校行事の企画・運営を行うことになり、工夫改善が必要となってくる。これまで以上に職員間のコミュニケーションを図り、保護者や島民の理解と協力を得ながら、学校運営にあたっていかなければならない。
- ◇ 今年度の研究指定校としての実践を継続していき、「実践的コミュニケーション能力の育成」に向けて、より充実した校内研究が求められる。